



オランダの絵本事情

日本では、オランダの絵本といえばミッフィーがよく知られていますが、子どもが小さい頃から親しんでいる絵本はほかにもたくさんあります。2020年ユニセフ調査「世界一幸せな子ども」ランキング1位のオランダで、子どもたちがどのように読書に親しんでいるのかレポートしました。

保育園での読み聞かせ

人口36万人、オランダ第4の都市であるユトレヒト市内のある保育園（0～3歳）では、先生2、3人に対して1日10人前後の子どもの預かっています。私が訪問した際は、9カ月～3歳10カ月の子ども12人に2人の先生と研修生が1人いました。

ここでの本の読み聞かせは、10時のフルーツタイムと12時のランチタイム、15時のおやつタイムのそれぞれ食事前の1日3回。その日の子どもの集中力の度合いを見ながら約5分かけて絵本を1、2冊読むのだそうです。本を選ぶときのポイントは、「同じ言葉が繰り返し出てきて、リズムカルに韻を踏む文章だと本の世界を体感しやすいのでそうした本を選んでいきます。一方的な読み聞かせではなく、一緒に絵を見ながら、数えながら、歌いなが

ら子どもたちと本を読み進めるようにしています。そうすると子どもたちがとても興味を持って集中してお話を聞いているように感じます」と先生。

また、この保育園では、朝保護者が子どもを連れてきてからしばらく一緒に子どもと本を読むことができたり、10時まではボランティアの方が子どもに本を読み聞かせたりしているそうです。読み聞かせの大切さに関して先生からは、「3歳になるのにまだ一言も言葉を発しない子どもがいるのですが、その子のお父さんには朝保育園へ来たらしばらく子どもと一緒に本を読むことをおすすめしています。家とは違う雰囲気の中で本と一緒に読むことは、子どもの言語発達を刺激すると思うので」というエピソードもありました。

この保育園では、読み聞かせ用の本棚とは別に、子どもがいつでも触れるように絵本の入ったカゴがソファの



保育園で読み聞かせをする先生。



子どもが自由に手に取れる絵本。

横にあり、子どもたちが自由に取り出して見ていました。カゴの中の本は破れたりページがバラバラになってはいましたが、子どもにとって本を常に身近に感じられる環境であることがとても印象的でした。

オランダでは4歳から小学校へ

オランダでは、4歳の誕生日を迎えると翌日から随時小学校に入学し、8年間学びます（一斉の入学式はありません）。ただし6歳までは、お絵描きや工作、音楽など、実質的に日本の幼稚園と同じようなカリキュラムを学びます。今回は、ユトレヒト市内の公立小学校でお話を聞いてきました。

■4～6歳のクラス

担任の先生によって子どもへの読み聞かせのスタイルはさまざまでした。先生の周りに子どもたちが集まって床に座り、

一緒に絵本を見ながら「どうしてこの主人公は泣きたい気持ちになったのかな?」と、子どもたちにその都度問いかけながら読み聞かせをする先生。先生の周りに椅子をグルリと輪状に並べて子どもが座り、「誰が、何を、どこでしたのか、あとで質問するからよく話を聞いてね」と注意を促し、読み聞かせのあとに質問しながら、「この本の主人公のカエルって両生類だよって言った子がいたけれど、どんな生き物? わかる人?」という具合に、本に関連した話を掘り下げる先生。スタイルはそれぞれだけれど、共通していたのは毎日10分間こうして子どもと本に向き合う時間を大事にしているところでした。

また、どの教室でも子どもたちが登校すると、クラスの真ん中に絵本のたくさん入った箱が置いてあり、自由に取って、一人で黙々と絵本を見る子ども、友達とワイワイ言いながら絵本を見る子ども、みんな思い思いに本を楽しんでいて、本をとても身近に感じられました。



教室の真ん中に置かれた、子どもが自由に読むことのできる絵本。



読み聞かせに耳を傾ける子どもたち。



「誰が、何を、どこで」と書いた紙を見せながら読み聞かせをする先生。



1



2



3

■6～12歳のクラス

このクラスになると、一冊の本を数日から数週間かけて読み聞かせをします。主に10時のフルーツタイムや12時のランチタイムの15分間に毎日先生が本を読み、子どもたちは食べながら聞いています。本の種類は、ファンタジーから歴史、ギリシャ神話まで幅広いジャンルで、それぞれの先生の選択で読み聞かせをしています。ある先生が「昔自分が読んでおもしろかった本を、子どもたちと共有できるのはうれしい」と楽しそうに話されていたのが印象的でした。

また8～12歳の子どもは、朝登校すると先生の読み聞かせのほかに、自主読書の時間が毎日20分間あり、自分の読む本を自由に選択します。ある先生の話では「子どもが自分のレベルに合った活字の本を読んでいるかはチェックしています。そのうえでどの本を読むかアドバイスすることはあります」と、基本的に子どもに選択が任されているようです。

読み聞かせボランティアの話

オランダには、たくさんの移民や難民がいます。オランダ語を母国語としない家庭では、子どものオランダ語の読み書きがオランダ人の家庭に比べて遅れているといわれます。

また、オランダ人家庭でも親の学びへの無関心などで言語に対する刺激が少ないと、子どもの言語発達が遅いといわれています。これが子どもの社会での孤立や、進学や就職機会の不平等につながるかと懸念されており、「全ての子どもに教育の平等を」という考えに基づいた「読み聞かせボランティア」があります。学校の先生や図書館員のアドバイスで親が依頼します。その中の一つ、ユトレヒト市NPO法人の Voorlees Express (<https://voorleesexpress.nl>) でボランティアをしていた方にお話を聞きました。

30代オランダ人女性の Karienさんは、モロッコ人家族の



4



5



6



(左) ユトレヒトの児童書専門店。2017年に世界したディック・ブルーナさんは、ユトレヒトに暮らし、読み聞かせもしていた。(右) ユトレヒトにはミッフィーのモチーフが点在、追悼をする光景も多く見られた。

8歳の男の子とアフリカ系家族の7歳の女の子に対し、1年ほどそれぞれ週1回の午後に訪問して、約1時間読み聞かせをしました。「最初は本の感想を聞いてもなかなか発言しなかった子が、20週目（1セッション20週間）には自分から話をしてくれて、成長を感じられました。子どもの親が伝統料理でもてなしてくれて、オランダ語が話せなくてもコミュニケーションを図ろうしてくれるあたたかい気持ちに触れ、特別なつながりのようなものを感じられて、とても良い体験でした」と笑顔で話してくれて、本を通した人と人のつながりの輪を垣間見た気がしました。

学校やボランティア以外に、家庭でも就寝前に本の読み聞かせをする習慣があります。一般的には0歳から9歳くらいまでですが、オランダでは「長ければ長い方がよい」とも言われており、何歳まで読み聞かせをするかは家庭によりさまざまようです。



7

オススメ絵本

1. 『Nijntje op de fiets』
Dick Bruna 作
子どもから大人まで愛読されているミッフィー絵本シリーズ（オランダではミッフィーのことをオランダ語の小うさぎ「Konijntje」から「Nijntje（ニンチェ）」と呼ばれています）。6色のブルーナカラーと併せて文章もリズムカルに韻を踏んでいて親しまれています。
2. 『Met Jip en Janneke door Nederland』
Annie M.G. Schmidt 作
昔から寝る前の読み聞かせの定番といえる Annie M.G. Schmidt シリーズ（『Pluk van de Petteflet』『Floddertje』『Otje』など）。『Jip en Janneke』は幼なじみの Jip と Janneke が一緒に繰り広げるお話。
3. 『MATILDA』
Roald Dahl 作
子どもが小さいときは読み聞かせに、大きくなると自分で一度は読むといわれているイギリス人作家・Roald Dahl シリーズ（『De GVR』『Sjakie en de chocoladefabriek』など）。MATILDA は寄宿舎に送られた女の子が意地悪な校長先生に立ち向かい幸せをつかむお話。
4. 『Dikkie Dik in de dierenrijk』
Jet Boeke 作
ミッフィーに続いて読み聞かせに全国的な人気のある Jet Boeke の『Dikkie Dik』シリーズ。ネコの繰り広げる身近な感動や驚きが親しみやすい絵とリズムカルな文章で描かれています。
5. 『DE GORGELS』
JOACHEM MYJER 作
オランダ人コメディアン Jochem Myjer の『De Gorgels』シリーズ。Melle 少年とこびとの Gorgels が繰り出す冒険物語。
6. 『Lampje』
Annet Schaap 作
2018年に最も優れたオランダ語児童文学に贈られる Gouden Griffel 賞を受賞し、根強い人気がある一冊。灯台守の父と暮らす少女 Lampje は、嵐の夜の事故によって悪名高い「黒い家」で働くことに…。怪物たちと繰り広げられるアドベンチャーの世界が描かれています。
7. 『DE KLEINE KAPITEIN』
Paul Biegel 作
1972年に Gouden Griffel 賞を受賞し、今も子どもに人気のある作品。一晩で大きく強くなれるという「大きく成長する島」へ行きたいと願う砂丘の上のボートに住む小さな少年船長。ある晩襲った高波で船が動き出し、島を目指して冒険へ出かけるというお話。

text & photography 吉見・ホフストラ・真紀子